

DAS KAPITAL

2023年新年1月学習会の案内 第47回「資本論を読む会」



日時：1月30日（月曜日）

午後6時30分 Zoomで開催

「第15章 労働力の価格と剰余価値との量的変動」

年末12月21日の「資本論を読む会」は、資本論(岩波文庫)第三分冊の「第14章 絶対的剰余価値と相対的剰余価値」に入りました。今回からの初参加者も加わって、それだけでも元気が出ます。しかし一気に理論的な概念展開が中心で、マルクスの、例の、少し難解な表現がまた、ゾロゾロと出てきましたよ。でもみんなで議論しながら、何とか分かってきたような気がします。実はこの章は、第二分冊でやった第5章以下の絶対的剰余価値と相対的剰余価値、労働過程論の“おさらい”みたいな箇所のようなですね。

新年は標題の第15章になりますが、何とかなるでしょう。参加者は9名-N3K2S3Tでした。

例によつての懇親会での話題は、ツイッターCEOのマスク辞任問題、札幌オリパラ、協会のあり方(社会主義論)とプーチン体制、黒田日銀の利上げ等々、たくさんのテーマで議論になりました。再スタートです。「みんなと一緒にやれば何とかなる」精神で参加してみましょう。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coccan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから - Takchan

3分冊：第5編 第14章 絶対的剰余価値と相対的剰余価値

TK

第5章の「単純な労働過程」の規定は、資本主義的生産過程の規定には十分ではない。同一の労働者が全ての機能を結合していたが、後(資本主義)では分離する。生産的労働は「全体労働者」の器官・部分機能としての労働になる。「生産的労働の概念」も変化し、労働者が生産物を生産するだけでなく、資本家のために剰余を生産する労働者のみが「生産的」である。

相対的剰余価値生産では「必要労働時間が短縮」されるが、絶対的剰余価値生産では「労働日の長さ」のみを問題にする。資本による労働の「形式的包摂：外延的發展」の中で、相対的剰余価値生産は自然発生し、「実質的包摂：内包的發展」へと進む。

労働自体がすでに社会化されているときのみ、ある者の剰余労働が他者の生存条件になる。

資本の出発基礎となる労働生産性は、自然的なものではなく歴史的・社会的なものである。

資本主義は「人間による自然の支配」を前提とする。「自然の豊かさ」は人類を「自然依存」にし、人類の発展の必然性を奪う。資本主義の母国は熱帯ではなく「温帯」。豊穡ではなく「多様性」が社会的分業の基礎であり、主体による「人工的」な「新たな、欲望・能力・労働手段・労働様式」の多様化が刺激される。自然力への「社会的な統制・節約」が、産業に決定的な役割を演ずる。

「暇な時間」を「自分のための生産時間」にするには一連の歴史が必要で、さらにそれを「他人のための剰余労働」(資本主義)とするためには外的強制が必要である。資本主義では、彼は自分の「生活手段・必要労働」のために、「暇な時間」は「剰余労働」しなければならない。自然の恩恵が説明できるのは「必要労働時間」だけであり、剰余労働は「人間労働に生得な神秘的性質」から生じるのではない。

J・S・ミル批判。

・リカード派の「剰余価値の原因」説を、「生活手段・生産手段が、生産に必要な時間よりも長時間持つこと」と言い変えた。しかしこれは、「労働時間の持続」を「生産物の持続」を混同した説。

・重商主義批判として、剰余価値が「労働の生産力」から生まれることを示し、「交換が行われない生産」でも発生する、と主張。資本主義の一般的条件である交換を「偶発時」とした。

・もし「労働者が労働完了まで賃金支払いを待てるのなら、彼はある程度までは、事業投資や事業の必要基金を提供する資本家である」という、完全な詭弁(労働者は剰余価値を受け取れない)。